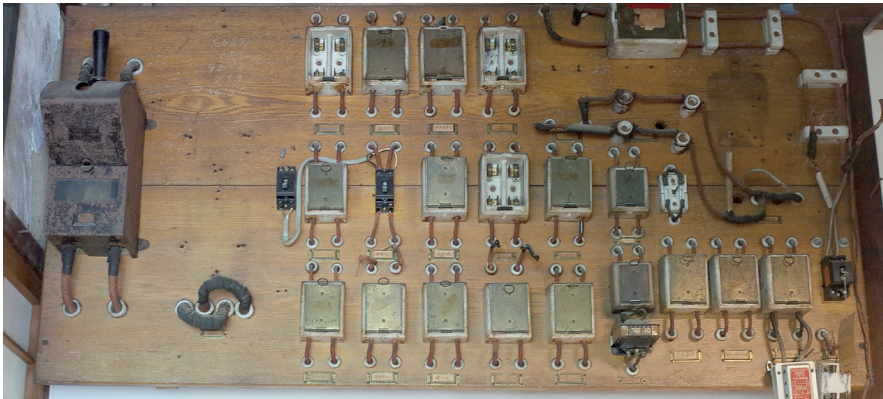


聴竹居を訪ねて



去る6月18日、三重地域会主催の見学会として、藤井厚二の「聴竹居」を訪ねた。先立つこと4月に開催された地域会総会において、聴竹居倶楽部代表である松隈章先生に現地からライブ映像を交えて講演をしていただき、その際に是非今度は実物を見学したい旨を申し出たことから始まった企画である。当日は三重地域会の会員と会員外の建築家数名および建築学生の計20名で伺った。倶楽部からは松隈先生はじめ計6名の方が我々のアテンドにお越しいただき、10名づつ2班に分かれての見学となった。

「聴竹居」には本屋、閑室、茶室と三つの建物と庭園があるが、茶室と庭園は保存修理中のため見学は叶わなかった。まずは閑室、藤井厚二の書斎でありプライベートな空間として使われた建築物で、基本としての造りは茶室を模範としている。床柱、床畳、花釘、掛込天井に垂木、木舞、竿縁、違い棚、さらに躡り口（後に拡大されたい）があり、外には待合もある。ただし先述のとおり茶室は別にあるので、茶室として使用はしないが、客をもてなし、仕事や趣味に没頭し、所謂「和敬清寂」を楽しむための空間であったと推察される。さらに見ていくと、米松のフローリング（小幅だが長尺で継手がない）、土壁の上に張られたクロス（和紙）、造り付けのソファ、幾何学デザインの照明器具、玄関の腰掛など、モダンなデザインも巧みに組み込まれ、約100年前の建物であるにも関わらず、このまま快適に使える空間だと感じた。

次に本屋、まずは玄関廻りの床まで届くドアと腰で終わる袖窓の組み合わせ、欄間窓と同寸法で90度回転させたデザインが秀逸である。中に入ると空間毎に床の高さを変えてあり、意匠的な効果はもとより、その段差を利用して空気の循環を積極的に行っている。そう「聴竹居」はパッシブデザイン住宅であり、床下換気口と排気筒が要所に設けてあり、かなり通風を意識しており、極めつけにクールチューブまで存在する。また、おそらく当時としてはありえない事だと思うが、オール電化住宅であったようだ。電気冷蔵庫、電気調理器、電気ストーブを賄うための配電盤が残っており、まるで現代のビルのそれのようであった。

内装を見ていくと、垂直面においては空間の境目に存在する弧を描く開口部が印象



的である。また垂直面に比べると水平面は、床・天井ともに「線が少ない」デザインとなっており、内部空間全体としてモダンな印象をうける。開口部ではやはりサンルームが出色で、天井付近まで高さのある連窓の腰窓なのに、コーナー窓だけ垂れ壁がおりている。これが内外ともに印象深いデザインとなっている。

細部に目を向けると、藤井自身がデザインした照明器具・時計・家具には、ライトやマッキントッシュの影響を感じる部分が多々ある一方、建物全体をみても同世代であるコルビュジエの影響は僕には感じる事ができなかった。あまりに世代が近すぎ、互いが現在進行形であったが故かもしれない。

閑室、本屋ともに共通して感じたことは、違和感のなさ。現代の住宅にあるべき室、空間が全て揃っており、その当時の一般住宅をイメージしてから見ないと、「普通」に感じてしまう。まさに、そこに聴竹居と藤井厚二の凄さがあると感じた。

出口 基樹 (JIA三重)
日新設計

